

2016 年度前期 学生授業評価アンケート集計結果に対するコメント

—経済学部—

経済学部長 臼井 英之

今回の経済学部前期授業評価アンケート対象科目数 39 科目のうち、アンケートが実施されたのは 35 科目、授業出席率に近似するはずの [延べ回答者数/延べ履修者数] の数値は昨年度と同調査より 6%以上改善し、約 61%となった。

〈設問 1〉「出席率」からすると、回答者の約 92%は、出席率 80%以上の学生であり、このアンケート回答自体はほぼ正当な評価とみなすことが許されよう。

出席率については上で述べたとおりだが、授業に取り組む姿勢を問う〈設問 2〉「授業中意欲的に取り組んだ(ノートをとる等)」は 4.11 点という、「ほどほど」の点数であった(前年度 4.09 点)。また〈設問 14〉「予習または復習をよくした」はもともと点数が悪く 3.15 点である(前年度 3.00 点)。この点については「予習・復習」の促進というより、むしろ授業準備の成果を問う授業、とか、授業の主要内容の振り返りを授業時間内に組み込んでしまうとかいった授業の工夫が必要であろう。2017 年度から、現在の 1 コマあたりの授業時間が延長される予定であるが、それにあわせて授業内容を見直すとともに、「予習・復習」の在り方あるいは概念そのものを見直すべき時なのかもしれない。

授業への全般的評価を示す〈設問 12〉「総合的にこの授業を評価できる」は 4.18 点(前年度 4.12 点)でそれなりの評価と思われるが、教員への重い問いかけとなるのは〈設問 11〉「この分野の関心と学力が得られた」の点数(4.06 点)と相関係数(0.77)であろう。この点、前年度に比して点数、相関係数のアップが見られた。〈設問 9〉「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」という問いに対しては、点数(3.63 点)・相関係数(0.41)ともに前年度より低下したことについては検討すべき課題である(前年度点数 3.63 点、前年度相関係数 0.67)。

われわれ教員が、この種の参加型、あるいは対面・双方向型の授業、広くはアクティブラーニングと称される授業を多面的に展開することで、学生の授業に対する充実感・満足感も上昇するであろう。それに応じて〈設問 6〉「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」(3.77 点。昨年度は 3.67 点)という評価も変わるに相違ない。

教員の教育への取り組み姿勢は概ね 4 点以上の評価を得ているのだから、あとは学生の学ぶ意欲を引き出し、学生みずからが学べる仕掛けを、われわれ教員がどうつくり上げていくかということが肝要になる、というのは前年度と変わらぬ所感である